

がんばる後継者、 おやじ 親父に負けるな！

—地元での粗飼料調達による低コスト和牛スモール肥育経営の挑戦—

渕上 浩一・加奈子（肉用牛肥育経営・佐賀県杵島郡江北町）



（写真1）家族写真（後右端 経営主 浩一さん、隣 加奈子さん）

地域の概要

渕上牧場のある江北町は、町制施行70周年を迎え、佐賀県のほぼ中央にある人口1万人弱の小さな町であるが、交通の利便性が高く、近年人口の増加が続く、温暖で風光明媚な地域である。

当経営が所属する佐賀県農業協同組合（以下、「JAさが」という）は、県連機能を有した県域の大型農協であり、米・麦・大豆の土地利用型農業を中心に野菜、果樹、そして「佐賀牛」生産を中心とした畜産など幅広い農業が盛んである。

経営・活動の推移

平成13年に浩一さんは佐賀県農業大学校を卒業し、父親が経営する交雑種スモール肥育

経営（肥育牛220頭）へそのまま後継者として就農した。就農時に、就農支援資金を借入れ、畜舎を増築し、肥育牛80頭を増頭した。

平成15年に（公社）佐賀県畜産協会の経営診断の助言により、他の肥育経営に先駆けて粗飼料（イタリアンライグラス）の生産・給与を開始し、コスト低減に取り組んだ。以降、夏作はスーダングラスから稲WCSへ、冬作はイタリアンライグラスからエンバクを経て大麦WCSへと種類を変えながら、作付面積を延べ12haまで拡大した。

平成24年に畜産部門は全ての名義を浩一氏に変更した。

また、酪農情勢の変化により交雑種スモール牛の調達が難しくなったため、浩一氏の強い意向により和牛スモール牛主体へ経営方針を変更した。

平成29年以降は、肥育もと牛の高止まりや購入飼料費の高騰の影響が大きくなったため、肥育成績の向上のため育成牛舎を1房4頭飼いから2頭飼いに変更したり、暑熱対策のため屋根に断熱資材を利用するなど工夫を重ねている。

経営・技術の特色等

当経営は、平成12年に父親が全国優良畜産経営管理技術発表会において優秀賞を受賞している。当時は、交雑種スモール肥育牛の飼

(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積 (a)	経営・活動の内容
平成5～6年	肥育牛 (F1・黒)	肥育牛 220頭	稲わら収集 50.0ha	・ 鉤公害復旧のため仮設牛舎に移転 ・ 肥育成績が低下 ・ 経営診断結果により、肥育牛を黒毛和種若齢肥育から交雑種スモール牛主体へ導入を切り替え ・ 和牛ETスモール牛の哺育も試みたが事故が多発
平成12年	肥育牛 (F1)	肥育牛 220頭	稲わら収集 50.0ha	・ 中央畜産会主催の全国優良畜産経営管理技術発表会にて優秀賞を受賞
平成13年	肥育牛 (F1)	肥育牛 223頭	稲わら収集 50.0ha	・ 現経営者が農業大学校を卒業し就農 ・ 就農支援資金により畜舎増築・増頭を開始 ・ 補助付きリース事業で堆肥舎を増築 ・ BSE発生で枝肉価格が急落
平成14年	肥育牛 (F1)	肥育牛 300頭	稲わら収集 60.0ha	・ 結婚 (現経営者)
平成15年	肥育牛 (F1)	肥育牛 300頭	稲わら収集 60.0ha イタリアンライグラス 0.5ha	・ 現経営者の妻が就農 ・ 経営診断の助言により、自給粗飼料の生産を開始 (以後、種類、面積を拡大)
平成24年	肥育牛 (F1・黒) 水稲 タマネギ	肥育牛 300頭	稲わら収集 60.0ha エンバク 6.0ha スーダングラス 5.5ha 稲WCS 0.5ha	・ 畜産部門は全て現経営者名義に変更 ・ 和牛スモール牛主体の導入へ経営方針を変更 ・ 稲WCSの生産開始
平成29年	肥育牛 (黒)	肥育牛 200頭	稲わら収集 60.0ha 稲WCS 6.0ha 大麦WCS 6.0ha	・ 大麦WWCSへの完全移行 ・ 子牛価格の高騰と疾病防止のため、育成牛舎を4頭から2頭群飼へ変更
令和元年	肥育牛 (黒)	肥育牛 234頭	稲わら収集 60.0ha 稲WCS 8.0ha 大麦WCS 6.0ha	・ 後継者の進路、就農と経営方針について家族で検討
令和3年	肥育牛 (黒)	肥育牛 216頭	稲わら収集 60.0ha 稲WCS 8.0ha 大麦WCS 4.0ha	・ ゆとりあり経営を目指し、環境条件の良い牛房を利用して飼育頭数を調整 ・ 屋根断熱や採光など牛舎環境を改善 (JA助成)

養管理を確立しており、稲わらやオガクズの収集・販売、たい肥販売を合わせた収益性の高い肥育経営を実現させていた。

浩一さんは、父親が確立した交雑種スモール肥育経営を稲WCSなどの粗飼料を調達しコスト低減を実現した和牛スモール肥育経営へと進化させ、所得向上と安定経営を図った。

また、水田の代掻きなど積極的に作業を受託したり、耕作放棄地等の管理を担うことで農地の荒廃を防ぎ、地域農業の発展に貢献したいと強い決意を持って取り組んでいる。

(1) 粗飼料を生産・利用した和牛スモール肥育経営の確立

令和3年販売牛の肥育成績は、主体の黒去

勢では出荷月齢29.1か月齢 (肥育日数774日) で出荷体重769.6kg、枝肉重量513kg (県平均513kg)、1日増体量0.809kgと増体が良好であり、肉質も枝肉格付等級が4・5率95% (県平均94%)、5率67.3% (県平均64%) と優秀である。

肥育日数が774日と長いものの、黒去勢の1日増価額は961円と高く、増価額 (販売額－導入価格) は743,989円と非常に大きい。

平成24年から浩一さんの強い意向により、交雑種スモールから和牛スモールへ肥育もと牛の品種を変更し、産地や導入月齢を調整しながら、飼料給与などの管理方法の習得に努めた。

和牛肥育に転換して10年ほどであるが、常

(表2) 経営実績 (令和3年度)

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)		家族・構成員	4.3人	
			雇用・従業員	0.7人	
	飼料生産	実面積		1,200 a	
	肥育牛 平均 飼養頭数	肉用種		221.5頭	
		交雑種		0.0頭	
		乳用種		0.0頭	
	年間 肥育牛 販売頭数	肉用種		105.0頭	
		交雑種		0.0頭	
		乳用種		0.0頭	
	収益性	所得率			17.6%
出荷肥育牛1頭当たり生産費用			1,402,697円		
生産性	肥育 (品種・肥育タイプ)	(黒毛和種去勢若齢)	肥育開始時	日齢(月齢)	111日
				体重	143.1kg
			肥育牛 1頭当たり	出荷時	885日
				出荷時生体重	769.6kg
			平均肥育日数		774日
			販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)		0.809kg
			対常時頭数事故率		1.0%
			販売肉牛1頭当たり販売価格		1,429,774円
			販売肉牛生体1kg当たり販売価格		1,858円
			肉質等級4以上格付率		95.0%
	もと牛1頭当たり導入価格		685,785円		
	もと牛生体1kg当たり導入価格		4,792円		
	肥育 (品種・肥育タイプ)	(黒毛和種雌若齢)	肥育開始時	日齢(月齢)	126日
				体重	129.8kg
			肥育牛 1頭当たり	出荷時	861日
				出荷時生体重	662.8kg
			平均肥育日数		735日
			販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)		0.725kg
			対常時頭数事故率		0.0%
			販売肉牛1頭当たり販売価格		1,094,092円
販売肉牛生体1kg当たり販売価格			1,651円		
肉質等級4以上格付率			100.0%		
もと牛1頭当たり導入価格		478,700円			
もと牛生体1kg当たり導入価格		3,688円			

に肥育成績の向上を目指し、飼槽間口への仕切り棒の設置や暑熱対策として肥育牛舎への外気導入・強制通気のための換気扇の追加設置、ガルバニウム材への屋根張替え、細霧装置の設置など飼育環境の改善に取り組んでいる。

また、経営診断のほか、パワフルさが畜産実践プロジェクト(現さが畜産GO×2(ゴーゴー)プロジェクト)により関係団体から助言指導を受けた。

なお、当経営の和牛スモール(黒去勢)肥育形態は、県内では他に無いので、他の肥育農家と競合しにくいと、比較的安価にもと牛を導入することができている。

(2) 粗飼料生産・給与への取組み

当経営は、以前より稲わら収集用の機械装置を完備し、牛舎周囲で大規模に稲わら収集とたい肥交換を行い、稲わら以外の飼料は購入していた。



(写真2) 肥育牛舎全景

平成15年はBSEや口蹄疫による経営不安が強い頃であったが、経営診断の助言により、機械装置が完備されていることから稲わら以外の粗飼料を地元（江北町・白石町）から調達することを検討し、まずイタリアンライグラス（冬作）を0.5ha作付けし、粗飼料生産に取り組み始めた。

収穫調整も当時普及し始めたラッピングサイレイジにするか、どのくらい給与するかなど、牛の状態をみながら、関係者からの情報収集と肥育成績をチェックしながら試行錯誤を繰り返し、肥育牛への利用方法を習得していった。

平成16年には夏作のスーダングラスの生産・給与にも取り組み、平成24年から夏作はスーダングラスから稲WCSへ、平成29年に

は冬作はエンバクから大麦WCSへ切り替えを図り、現在の飼料生産体系となった。

周囲は、米・麦・大豆を中心とした農業が盛んな地域だが、農家の兼業化や高齢化が進み、当経営への圃場管理の依頼が多く、飼料生産に利用できる稲WCSの生産政策は追い風となった。

大麦WCSは、稲わらや稲WCSと収穫時期にずれがあるため、機械装置の有効活用と粗飼料調達の労働時間を分散させることができ、労働負担を平準化させることができている。1年を通して粗飼料を調達できるため、天候の影響による粗飼料の品質低下を最小限に止めている。

一方で、集落営農のブロックローテーションが盛んな地域のため、粗飼料生産を増やす



(写真3) 育成牛舎



(写真4) 仕上牛舎



(写真5) 田植え後のWCS用イネ



(写真6) 大麦WCS

上で、大きな課題が2つあった。

1つは、牧草を作付けした圃場で翌年以降に牧草の発芽がみられること。クレームにより牧草の除草を経験したため、水稻と大麦の種子を利用したWCS体系へ集約するきっかけになった。

2つ目は、湿気を嫌う大豆圃場の隣で、稲WCSを栽培すると水田に冠水した水が大豆圃場にしみ出すことであった。試行錯誤の結果、圃場境界の畔だけでなく、専用機械を導入して内側にもう1つ畔を作り、二重の畔による対策を実践した。

これらの対応策により、現在では稲WCS（8ha）及び大麦WCS（4ha）を生産・調達して、ハイキューブ以外の粗飼料を全て地元から調達している。

(3) 粗飼料生産・調達による購入飼料費の低減

和牛スモール肥育経営は肥育期間が長いいため、稲WCS、大麦WCSを自給し、稲わら地域の耕種農家と連携して継続的に自家調達することにより、購入飼料費の低減に努めている。

粗飼料生産に係る機械装置の減価償却費や燃料代等を考慮しても、自家調達した方が粗飼料を購入した場合より、販売牛1頭当たり31,923円安価である。

購入飼料費の高騰は、先行きが不透明であり、粗飼料だけでも安価に調達できることは経営面で非常に有利であり、安心できる材料となっている。

地域に対する貢献・共生

(1) 堆肥供給や耕畜連携等による地域農業との共生への取組み

当経営のたい肥は、ショベルローダーによる切り返しに加え、マニアスプレッターを2回利用して粉碎し発酵を促しており、きめ細やかで利用しやすいたい肥として口コミで人気がある。

稲WCSや大麦WCSなどの粗飼料生産・調達（延べ12ha）により耕種農家との利用計画やたい肥散布契約などを通して、またたい肥と稲わら交換（延べ50ha）を通じた良質たい肥の生産・供給を行い資源循環型農業への取組に力を入れている。

また、稲わらとたい肥交換を行う過程で、当経営では機械装置を利用して積極的に耕耘や代掻きを作業受託することで、兼業化や担い手不足で高齢化する耕種農家の圃場管理を行うなど、地域の中核的な農家としてポジションを確立するとともに、地域農業との共生を図っている。



(写真7) 耕種農家への堆肥販売

(2) 「佐賀牛」生産への貢献

「佐賀牛」は、枝肉格付で肉質等級が5等級または4等級で、かつ脂肪交雑のBMSナンバーが7以上のものであるが、佐賀県やJAさが、肥育農家などの積極的なPR等により好評を得ている。

浩一氏は、肥育牛部会及び青年部会の一員として、食肉センターや流通業者等と意見交換を行いながら、消費者が望む牛肉づくりに邁進している。

女性の活躍・働きやすい 職場環境づくりの取組み

(1) 女性の活躍

現在、妻と母の2名が従事しており、ともに大型特殊免許を持ち、トラクターやショベルローダーを駆使している。

業務は、妻は子育てと家事が中心だが、肥育牛の飼養管理や粗飼料調達に携わり、母はパソコン会計ソフト（ソリマチ）を利用して会計業務も担当している。

(2) 働きやすい職場づくりの取組み

当経営では、杵島農業振興センター（旧杵島農業改良普及センター）や江北町に指導を受けながら家族経営協定を締結しており、粗飼料収穫時期以外は自由に休みを取ることができ、無理・無駄のない家族経営を目指して

いる。

職場である肥育牛舎やたい肥舎が自宅横に、粗飼料生産の圃場が自宅近くにあることから、これ以上ない職場環境である。

将来の方向性

(1) 次世代への継承

当経営は、肥育成績や経営収支、財務内容が優秀で安定している。

今後、長男が佐賀農業大学校（畜産専攻）卒業後に就農予定であり家族労働力が増えるため、家族に無理、無駄が無いように、かつ家族での時間や余暇を満喫できるように労働時間に余裕のある経営を目指したい。

また、肥育経営の生産基盤、経営基盤を強固にするため、かつ経営の継続性や信用を高めるために法人化を検討している。

(2) 今後の経営計画

県内の肥育農家と連携し「佐賀牛」生産にこだわり、消費者に安全、安心な牛肉を供給するとともに、たい肥や農作業を通して地域農業の下支えに努めたい。また、外部環境に影響を受けないように、後継者が就農した後に繁殖部門への取組を検討したいと考えている。